Le Sentiment de l'Honneur chez Alfred de Vigny

田　中　隆　二

Alfred de Vigny の文学の魅力をつくっているものとして，彼の作品の主要なものに流れている崇高美，悲壮美，精神美をあげることができる．例えば，詩篇 "Moïse" にみられる homme de Dieu, Moïse の苦悩，小説 "Cinq-Mars" における Cinq-Mars と De Thou の従容として死に就く姿，小説 "Servitude et Grandeur militaires" の三人の軍人の自己犠牲，未完の小説 "Daphné" の皇帝 Julien の最後，詩篇 "La Mort du Loup" の狼の stoïque な死はもとより，詩篇 "La Bouteille à la mer" の船長の，後に続く世代と理性の力を信じて，自然の猛威に押しひしがれながらも立向う雄々しい姿，これは "L'Esprit Pur" にかいま見られ作者 Vigny 自身の態度の基礎ともなって，これらのすべてにこのことは確認されるのである．そうして，この高貴なる反抗の美学を支えているものとして Vigny の名誉の感情は見逃すことのできない重要性を持っているのである．この名誉の感情は実にこうした美を形成する中軸であって，これを芯とし，それに繊細な感受性から生まれる優雅，弱者に対する憐憫，同朋に対する限りない愛，更には彼の強靱な理性に由来する現実直視と，この冷酷無慚な現実を越えて真善美を追求しようとする理想主義がないまぜられて彼の文学の特質が生み出されているのである．Vigny 自らこの感情を尊崇し，"La Religion de l'Honneur" と呼んでいるが，この表現から理解されるように，これを神格化しさえしているのである．従来，Vigny の文学に関心を持つ人々，批評家で，この彼の名誉の感情に言及しない人はまずないと云ってよい程であった．しかしながら，それは専ら小説 "Servitude et Grandeur militaires" と関連して述べられて来たのであり，より深く追求された場合でも詩篇 "La Mort du Loup" に結晶する所謂 Vigny の stoïcisme と結びつけて論じられたのである．そのこと自体は全く至当である．何故ならば，この名誉の感情が明確に，意識的に築きあげられたのは王政復古期に彼が体験した軍隊生活の土台の上にであって，1830年の7月革命によって見舞われたその後の彼の全生涯を賭けた最大の精神的危機を潜り抜け，真実に死との対決を迫られた時期に於てであったからである．しかし，更に具さに調査するならば，意識化の程度は浅くとも，また他の要素に圧迫されているとは云え，この感情がこの危機以前に，殆んどその幼時から彼の心の奥に植えつけられていたことは，初期の作品にもうかがわれるし，後年記された幼時の回想に判然と見出されるのである．また一方，この感情は小説 "Servitude et Grandeur militaires" の結論部で，「名誉の宗教」にまで高められ，更に詩篇 "La Mort du Loup" でこれ以上ない高みにまで上ったとは云え，これらの作品の完成後でも彼の念頭を去らず，少しずつ変容して，後の他の思想と結合するように思われる．したがって，この感情が既に幾度も触れて来た小説 "Servitude et Grandeur militaires" で一度固定したことを認めながら，それが培われた跡とその後にやや変化するその過程を辿れば，これを彼の作品に一貫して流れる一つの大きな特質として捉えることが可能と思われるのである．その意味から，ここでは Vigny の名誉の感情を分析し，

その特性を規定して，それに対する一つの解釈を試みようとするのである．その作業を通して明確にされることではあるが，Vigny の名誉の感情は実は正義を実現するとの理想に燃えた，恰も聖戦に出陣する騎士の抱いていたような，心の中に湧き立ち人を勇気づける，自ら進んで受け入れた義務の潑剌とした感情ではない．そこに見られる色調はむしろ悲痛なものであり，絶望的でさえある．その解釈として彼の所属階級である貴族の没落を持出すことは容易に思いつかれることである．しかし，評価と云う点から考える時，その解釈は正しくとも一面的であるとの謗りを免れないであろう．彼の名誉の感情にもその陰翳を落している Vigny の pessimisme は最終点としてではなく出発点として評価されるべきだと考えられるからである．次の文章は "Le Journal d'un Poète に見出されるものでこの推量が的はずれではないことを証拠づけると思われるのである．

Cinq-Mars, Stello, Servitude et Grandeur militaires (on l'a bien observé) sont, en effet, les chants d'une sorte de poème épique sur la désillusion; mais ce ne sera que des choses sociales et fausses que je ferai perdre et que je foulerai aux pieds les illusions; j'élèverai sur ces débris, sur cette poussière, la sainte beauté de l'enthousiasme, l'amour, de l'honneur, de la bonté, la miséricordiense et universellle indulgence qui remet toutes les fautes, et d'autant plus étendue que l'intelligence est plus grande. (Le Journal d'un Poète, 1835. Pléiade Tome 1 p. 1037)

Vigny の名誉の感情はこのように灰燼の上に築き上げられるべきものの一つに数えられていて，pessimiste な色彩をもっているだけでなく，積極的な何物かを蔵していることは注目すべきである．（註1）

一

L'honneur についての定義は "Servitude et Grandeur militaires" の結論部においてなされている．ここに Vigny の l'honneur は結晶しているのである．したがって，その特質はほとんどこの結論部において探り得ると思われる．必要に応じて "Le Journal d'un Poète" に見出される l'honneur に関する言及を参考とし，上述の "Servitude et Grandeur militaires" の結論部に列挙されている，或いは云い換えられている Vigny の言葉から，彼の l'honneur の性質を規定してみる．これは彼自ら述べているように定義しようと企てる度毎に言葉に迷う，説明しがたいものである．しかし，l'honneur の名を聞くと，自分自身の一部である，自分の内部に存在する何かが動くのを感ずる．その何物かが彼のいう l'honneur となるのである．その輪かくをできる限り明らかにする為に彼の説明を順を追って検討しよう．その順序からするならば，l'honneur が登場せざるを得ない状況をまず明確にせねばならない．簡略して云うなららば，それは彼が兵士の支えになるものを求めていた状況においてである．いま少し説明を加えるならば，現代の paria である兵士，今や円形競技場で拍手を浴びることさえなくなった剣闘士とも云うべき兵士，彼が赴くことを人が望むところへほうり出され，今日はこの徽章と闘いながら明日はその徽章を胸につけるようになるのではないかと危惧している兵士，このような兵士にとって心の支えとなるも

の，この冷酷と失望の時代にあって，彼等を燃え立たせ，奮いたたせることのできる感情，これを Vigny が探ねていることが，まず念頭に置かれねばならない．彼は次のような問を発する．

Dans le naufrage universel des croyances, quels débris où se puissent rattacher encore les mains généreuses ?

その彼が暗い海の上にしっかりとしたものを認めた．最初，それを疑わしく眺め，はじめの間は信じなかった．が，やがて，それが暴風雨の中でも支えの役をするに足る程丈夫であることがわかった．

Ce n'est pas une foi neuve, un culte de nouvelle invention, une pensée confuse ; c'est un sentiment né avec nous ; indépendant des temps, des lieux, et même des religions ; un sentiment fier, inflexible, un instinct d'une incomparable beauté, qui n'a trouvé que dans les temps modernes un nom digne de lui, mais qui déjà produisait de sublimes grandeurs dans l'antiquité, et la fécondait comme ces beaux fleuves qui dans leur source et leurs premiers détours, n'ont pas encore d'appellation. Cette foi, qui me semble rester à tous encore et régner en souveraine dans les armées, est celle de l'Honneur.

このように説明された l'honneur が兵士の行動の支えとなることは第一に銘記すべきである．けれども，この特別な職務についている人のみを対象とするのではない場合は，これが信仰の世界的難破の中で縋るべき支えとなれるものであること，人間の誕生と共に存在しているものであること，宗教に附随するものではないことに，次には注目しなければならない．

C'est, pour la plupart des hommes, un dieu et un dieu autour duquel bien des dieux supérieurs sont tombés. La chute de tous leurs temples n'a pas ébranlé sa statue. (...) C'est une vertu tout humaine que l'on peut croire née de la terre, sans palme céleste après la mort ; c'est la vertu de la vie. (...) C'est une Religion mâle, sans symbole et sans images, sans dogme et sans cérémonies, dont les lois ne sont écrites nulle part; (...) L'Honneur, c'est la conscience, mais la conscience exaltée. (...) L'Honneur, c'est la pudeur virile.

L'honneur とはこのようなものであるとすると，それを持たない為に吾々の感ずる恥辱は由々しいものとなる．この名誉の感情の聖性を Vigny は donner sur la parole d'honneur という表現を例として説明している．

Voilà que la parole humaine cesse d'être l'expression des idées seulement, (...) elle devient le serment même, parce que vous y ajoutez le mot : Honneur. Dès lors, chacun a sa parole et s'y attache comme à sa vie.

Renaud 大尉（註２）は自分が誓いを破ろうとしているのだと気がついた時，突然ある恐怖に襲われ，気が狂ったと思う程であった．賭博師にも約束事はあり，それを聖なるものと尊重し，守る．しかし，それが戦士によって果される時，就中至高の美を持つのではないであろうか．破寺の中の最後の燈明のようなこの名誉の感情は，古代からの神である．この知られざる神の祭壇の石は魔術的磁力でもって鋼鉄の心，強者達の心を惹きつける．"Servitude et Grandeur militaires"

では Vigny の戦友であった軍人がこの誓い石の上で頭を打ち砕くであろう，名誉の宗教の聖者であり，殉教者である．

ところで "Le Journal d'un Poète" によると，

L'Honneur, c'est la poésie du devoir.

とも定義されている．義務は "Servitude et Grandeur militaires" に登場する17才の人妻 Laurette や，その夫の流刑囚も口にするが，彼を銃殺せねばならなかった艦長は，まさにその義務感を結着にまで押し進めたのである．老特務曹長は義務を大切にするあまり，検閲の時に薬包が一つ足りなくても恥辱のために死んでしまう程であった．彼のこの過度の義務感は実際彼を死に追いやるのである．Renaud 大尉は Collingwood 提督の中に祖国と義務に身を捧げた真の市民を見出した．彼はこの提督の学校で，義務の感情によって抑制し得るあらゆるものを学んだのであった．彼は皇帝の歿するまで，友人達のあらゆる勧告があったにも拘らず，彼が礼節と名づけているものを重んじて二君にまみえないことを義務とみなしていた．そうして

J'ai fait mon devoir. Cette idée-là fait du bien. Si le pays se trouve mieux de tout ce qui s'est fait, nous n'avons rien à dire.

と云って息をひきとる．Vigny によると軍人の或いは軍隊生活の美には二種類ある．それは指揮の偉大と服従の偉大で，前者は全く外観的，能動的で，光輝ある，ほこらしい，自己中心的，専断的なもので，日に日に稀れとなり，望まれることが少くなっている．それは文明が益々平和的となるにつれてそうなるのである．後者は全く内面的，受動的で，人目につかず，慎み深く，献身的かつ堅忍不抜なもので，今後は日増しに敬われるようになるであろう．なんとなれば，征服者の精神が衰えている今日，気高い性格が軍職に持ち来る偉大なるものすべてとは，戦うことの栄光にあると云うよりは，しばしば忌わしい義務を黙って耐え，毅然として果す名誉の中にあると思われるからである．ここにおいて義務は実に名誉の基盤であり，義務が果されるのが犠牲的であればある程，名誉はそれに比例して気高く美しいものとなる．Vigny の讃える名誉は義務の遂行を命令し，犠牲を払うことを要求せざるを得ない．名誉を支えるものは義務感であり，義務を果すのは自己抛棄を通してである．"Servitude et Grandeur militaires" の主人公達は，実際，三人共この自己抛棄を実践しているのである．この軍人に共通な一つの観念が彼等に偉大な性格を与えているが，この軍人の自己抛棄とは殉教者の十字架よりも一層重い十字架なのである．その偉大さと重さを知るには長い間それを荷っていなければならない．自分自身の完全な抛棄とは死の絶えざるまた平然たる待機であり，思想と行動の自由に対する全き断念である．信仰の世界的難破にあって尚縋るべき支えとなる Vigny の l'honneur とはこのような諦念である自己抛棄と克己的な義務感の上に立っているものであることは留意せねばならない．

以上主として "Servitude et Grandeur militaires" の結論部に見出される Vigny の考えている l'honneur を，彼自身の説明によって検討したのであるが，ここに明らかにされたその性質は次の二つにまとめられると思われる．第一は aristocratique または chevaleresque と呼び得る性質である．"Le Journal d'un Poète" にも

Le respect de sa maison, de son nom et de ses aieux en fut souvent la base. (en=de la religion de l'honneur 筆者註) 1832 とある．それは畢竟義務と誓言の絶対化であるが，その義務，誓言の対象が実は問題となるのである．第二は，anti-chrétien または anti-théiste とみなし得る性質である．それは，人間の徳，地上の徳の神格化である．キリスト教に代り得る宗教であることが重要なのである．この二つの性質が，良心，しかも昂揚された良心と云う言葉で一つに合わされたもの，それが Vigny の l'honneur であると規定できると思われるのである．ただし，このうち第二のものは，小説 "Daphné" の構想の進展するにつれて変化する．第一の性質も全く不変ではないが，第二の性質の変化の方が顕著である．これについては（三）で述べることになるであろう．

二

Vigny の「名誉」の感情は前章で見てきたように chevaleresque, anti-chrétien といった性質を持っている．このような性質を付与したものは何であって，またどのような形成過程の後にこのように定着したのであろうか．ここでは，こうした事について考察してみる．

この事には，彼の生涯における諸々の事件が，どれも何らかの意味でかかわりを持っていることは論をまたない．しかし，何を措いても数えられねばならない第一のものを挙げれば，それは当然彼の家柄であろう．「名誉」の感情は名を惜しみ，家を重んずる気持である．両親，伯母等から植えつけられ，彼が終生棄て去ることのできなかった自分の家門に対する意識がその根幹である．それは "Le Journal d'un Poète" 及び，近年出版された "Mémoires inédits" に収められている往時の回想に判然とうかがうことができる．今その意識を調べると，家柄の古さ，裕福さ noblesse de l'épée としての誇りが，それを構成する三つの主要な点であることが判明する．その中でも noblesse de l'epee としての誇りは特に重要であって，事実はどうであれ，彼の意識に於いては，それは絶対主義体制下の貴族と云うよりは，むしろそれ以前の貴族 "Cinq-Mars" に於いて Richelieu を批判する Bassompierre 元帥のような，あるいは更に古い中世的な騎士の誇りであることを感じさせる．単に aristocratique と云うよりは，むしろ chevaleresque とその「名誉」の感情の特質を規定すべきだと考える理由はここにある．家柄の古さに固執し，所領が多かったことを強調するのも，これとのつながりにおいて理解されるのである．Vigny の伯父の一人が chevalier de Malte として承認されるに際して，父系，母系それぞれ四代にわたる貴族の証明をせねばならなかった．それによると 1570 年 Charles 九世によって署名された公書から推して五代目の先祖 François de Vigny までは確実に遡れるのであった．それ以前となると年代等で不明な点が多いが，承認に必要な貴族の証明は書類上確認された．古い書簡，口伝等から一族の出身地が Pontoise 附近であること，Château de Vigny と呼ばれる館に彼等が最初住んでいたこと等が知られている．回想の中で Vigny はその château が彼にまで伝えられず，ずっと昔に人手にわたった次第を語っている．それは畢竟家柄の古さを誇示したい為であることは容易に想像される．またこの城こそ相伝されなくとも，家が裕福であったことは，彼によると曾祖父にあたる

Guy-Victor de Vigny が Beauce 地方有数の財産家であったことで証明できるのである．曽祖父は Tronchet, Moncharville, 両 Emerville, Isy, Frène, Jonville, Folleville, Gravelle 等々の領主だったのである．彼の先祖はすべて軍務に服し，capitaine の位に昇るまで王に仕えた後にこれ等の所領へ帰っていたのである．Vigny はこれ等の領地のどの一つも相続しなかった．それは大革命のせいであると彼は考えている．大革命そのもの，またその後の共和制を彼は必ずしも否定はしていない．それどころか，必然的として受け入れていると考えられる．けれども，名に負う矜恃と現実の自分の立場との乖離は，やはり，このようにして納得されねばならなかったのである．（註3）一方，母方の一族も François 一世の時代以来フランスに帰化している Sardaigne 出身の貴族であって，少くとも1515年まで遡ってその家柄の由緒正しさが証明され得るのである．またこの一族は王の海軍に奉仕していたのである．この一族も，大革命によって没落した．だが Vigny が相続した唯一の領地はこの母方に由来する．Vigny の象牙の塔と呼ばれるには，あまりに侘しいその Manoir du Maine Giraud で，彼は確かに不朽の詩篇の幾つかを生み出している．しかし，そこは，また彼の「名誉」の感情の現実における最後の砦でもあったことは看過ごしがたいのである．「名誉」の感情のうち重要なものには，この家柄にたいする誇りに附随して義務と誓言の尊重ということがある．これを Vigny は七年戦争の廃兵である父親から Les Bourbons への忠誠，愛着という形で吹きこまれた．回想によると，彼は Louis 十五世の手に触ったことのある父親の手に一種の宗教的畏怖を感じて触れ，父親は彼に La Croix de Saint Louis を接吻させて，彼の心の中に一家の父に対して子が抱くであろうような愛情，往時の貴族が Les Bourbons に対して抱いていたような愛情，即ち畏怖と臣従からなる愛情を植えつけたのであった．(註4) これに対して Vigny の母が彼の人生への門出にあって勧めたものは遙かに理性的であった．それは合理的外装をまとっても，王に対する無条件的忠誠，貴族の称号が課す絶対の義務を説いている点では大同小異と云える．しかしながら，この母親の勧める厳しく美しい言葉の中に，Vigny の「名誉」の感情が単なる chevaleresque というより以上の特質を持つにいたる素因が見出される．それは，理性，意志，努力の確固とした尊重ということであった．1789年の大革命で実質的に崩壊し，その後王政復古で息を吹き返したかに見えても，実は形骸に過ぎない貴族制にあって，封建的な義務や誓言の観念，没理性的忠誠心は実は存続し得なかった．Vigny の「名誉」の感情の特質としてみられる chevaleresque な性質は強固な制度を背景とするものではなく，外見こそそうであっても内実は具体的なものを持たない，全く抽象的なものとならざるを得なかった．騎士道精神と云うものが本来制度上のものでなく，騎士の個人道徳的なものであると云えるとすれば Vigny の「名誉」の感情は正にその意味で chevaleresque と云えるであろう．こうした特質の形成が明らかになるのは 1830 年 7 月革命を契機とする．（註 5）これによって chevaleresque な性質のうち封建的，非合理的な部分が消去されて，人間的，理性的，克己的なものが彼の「名誉」の感情の真の特質として残るのである．このさまは "Servitude et Grandeur militaires" の第三話の主人公 Renaud 大尉によって体現されているので，彼の身上話を要約して例証としよう．Renaud 大尉は彼の世代の誰とも同じ様に Napoléon の栄光に憧れていた．彼が軍隊に一生を捧げるよう

になった決定的な原因は Napoléon によって額に接吻されたことであった．この時彼は茂みの中で神を見た Moïse の恐怖を感じた．Bonaparte は自由人としての彼を抱き上げたが，Bonaparte の腕が彼を甲板に下した時，そこに残ったものはもはや一人の奴隷に過ぎなかった．彼は Napoléon に対する盲信に陥ったのである．ところが，皇帝が Pie 七世を強迫するのを偶然かいまみた彼は，個人的野心の為，この天才がいかに堕落しているかを知り，一個の人間に身を捧げることは狂気の沙汰だと感じた．後に彼は英国海軍にとらわれの身となる．彼が監督下に置かれた Collingwood 提督に親しく接する間に，彼は一個の人間に対してではなく，祖国と義務とに身を捧げた真の市民を知った．また提督との間にかわしたいかなる逃亡の計画もしないという誓いを危く破りそうになったが，恥ずべき行為の中にある．良心ある人間ならば誰でも感じる有毒なものに気付いて，不名誉を免れた．しかし，この誓いを守ったために，許されて故国へ帰った時，Napoléon の不興を買う．けれども，その日から彼は自己を内面的に評価し，自分に自信を持ち，性格が純化され，形成され，完成され，強靱になってゆくのを感じるようになった．その日から，外面の出来事とは空しいものであり，内にある人間こそすべてであることが分った．要するに彼は自分の良心を感じ，ひたすらそれを頼みとして，一般の判断，かがやく報酬，めざましい成功，戦報の名声などを，おろかしいだぼら，それに頭をなやまず価値のない偶然のたわむれと考えようと決心した．更にロシヤの守備兵を襲撃して，14才ばかりの少年士官を殺した時以来，彼は戦争とは暗殺でできあがっているのだと悟り，その後は生涯軍刀を棄てて，彼が殺したその若い士官が持っていた籐の杖をもって指揮したのである．1830年の7月革命の2週間前，彼は辞表を出した．しかし，布告を見て，彼は部下のところへ戻って来た．彼等を見捨てたと思われるのは名誉に反することだと考えたからである．彼は浮浪児の撃った一発のピー玉の為に死ぬ．臨終の際も雄々しくありたいと願って，友達に自分の口を閉じてくれるように頼み，自己の義務を果したと考えて喜んでいると述べて Renaud 大尉は息をひきとるのである．この大尉の言葉の中には，義務，誓言，献身等「名誉」の感情の chevaleresque な性質を示すものはすべて見られる．しかしながら，それが封建的，非合理的なものを脱して，より自覚的，近代的となっているのが確実に感得される．義務は家臣としての王に対する義務ではなく，市民としての祖国に対する義務であり，誓言は対等な個人間のそれとなっている．これを守るのは良心がさせるのであって，盲信とは絶縁しているのである．Vigny の「名誉」の感情の特質はここにあるので，序にも述べた如くそれは貴族としての家柄に対する意識を土台とし，主として軍隊生活の体験を通して形成され，1830年の革命を決定的契機として定着されたと云い得るのである．

Vigny の「名誉」の感情には anti-chétien と呼び得る性質があった．次には，これが何によるのか，具体的にどのようなものであるのかを調べてみよう．それは主として母親から受けた宗教教育，幼時から親しんだ聖書によるものと云える．それが青年期に愛読した Chateaubriand, Chénier, Byron, Moor, Milton 等の文学作品の影響を受けて漸次明確となった．影響という点からは，Byron の影響が一番大きいと云えるのである．

Vigny の母親は神の存在を信じ，吾が子にも信仰を持つように勧めてはいるが，厳密な意味で

の catholique ではなかったようである．異教徒への寛容を説いたり，神の存在の証明のしかたなどには合理的に物事を把握する傾向が強く感じられる．（註6）"Mémoires inédits" で回想されている彼女は，また数学が得意だったようで，この母親から学んだ分析と冷静な推論の習慣が，彼の anti-christianisme の種を播いたと考えられる．（註7）この理性の眼が幼時より親しみ，全く魅了されて，いつも肌身離さず携行し，かつは全部を暗誦する程まで熱愛していた聖書にも向けられるようになったのはあり得る事と思われる．Byron の影響の大きさは否定できないとしても，それを受け入れる Vigny の anti-christianisme の素地は，逆説的に，聖書によって造り出されていたと云い得るのである．それに，ここでは影響の問題を扱うのは本意ではないので，そこにはByron の影響があるとの了解の下で，Vigny の "Les Poèmes Antiques et Modernes" に収録されている聖書取材の詩篇をとりあげて，彼の初期 anti-christianisme を概観する．

"Les Poèmes Antiques et Modernes" の所謂聖書取材の詩篇とは "La Femme adultère", "La Fille de Jephté", "Moïse", "Eloa", "Le Déluge" の五篇である．このうち "La Fille de Jephté", "Moïse" "Le Déluge" の三詩篇が旧約聖書に想を得たものであることは容易に想像されよう．これ等を，当面問題としている Vigny の anti-christianisme を了解すると云う立場のみから粗雑のそしりを覚悟で概括すると，これ等には神と人間との大いなる疎隔が問題にされていると云えるようである．Moïse は Homme de Dieu であって，通常の人間ではない．しかし，強大な力を神より賦与されたこの超人にすら，神より負わされた責務は重すぎた．彼はついに地上の眠りで眠らせてくれるように神に懇願し，嫉妬深い神のいます山上に姿を消す．これは天才の孤独，その運命を象徴した詩との定評があるが，普通人がその前に出ると畏れ戦慄いて顔もあげ得ない，この神の代理人 Moïse の背後には姿の見えぬ想像を絶する程に恐ろしい，とうてい吾々普通人には理解できない神が存在するのが想像されるのである．"Le Déluge" は義人も悪人も共に滅す神の非情への抗議である．またそこには別れることを拒んだ為に死なねばならない愛の殉教者達の姿も描かれている．非情な神への抗議の為に振り上げられる拳は，同朋である滅ぶべき人間へ差し伸べられる手となる．これが Vigny の anti-christianisme の一つの特徴である．"La Fille de Jephté" においては Jephté は不敬にも神を復讐の神と誹謗し，この嫉妬深い神に気に入るのは血煙だと告発する．"La Femme adultère" が新約聖書に着想したものであることは異論の余地がない．"Eloa" はその点判然としないが，キリストの涙から生まれたとあるから新約聖書と関係があると云っても支障はないであろう．しかし前者，後者を問わず重要なことは，新旧どちらの聖書に霊感を受けたかと云うことよりは，他の三篇の主要な点が神の告訴であるのに対して，これ等にあっては人間への同情，人間に与する気持の方が支配的だということである．この二つの詩篇にキリストが登場するのは，その意味から象徴的である．ここから想像されるのは，人よりは神に近く，その為に人間から畏怖される Moïse と異り，ずっと人に近い人類愛に満ちたキリストの像である．"Les Poèmes Antiques et Modernes" にはこれ以外に，聖書取材と呼ぶにはやや抵抗を感ずるが，そこで述べられていることが聖書，またはキリスト教と関係すると思われる詩篇が幾つかある．"La Prison", "Le Trappiste", "Paris" 等がそれである．その上に未完成

で詩集にも収録されていないが，この部類に入ると考えられるものとして，"Le Jugement dernier", "Suzanne", "Satan Sauvé" 等がある．ここでは "La Prison" に少し触れて置きたい．何故なら既に見て来たヘブライの非情の神，キリストによって象徴され得る人類愛とこの "La Prison" に見出される Pascal 的人生観とが一体となって Vigny の初期 anti-christianisme を形成していると考えられるからである．そうしてこの anti-christianisme の完成と平行して「名誉」の感情も体をなすので，それが反キリスト教的性質を有することはそこから納得されるのである．"La Prison" は牢獄であがいている罪なき人間の苦悩という問題を扱っている．主人公が鉄仮面であるのは aristocratique な好みを感じさせる．しかし，それはここでは重視しない．重要であるのは一度も他の人間と交際したことがなく，生まれ落ちてからずっとこの牢獄にいるため罪を犯し得ない人間が，鉄仮面で顔を覆われ鎖につながれていること，懺悔をすれば神の赦免を約束すると云う司祭に対して神の存在を疑う言葉を発し，来世を望まず（というのは来世でも鎖を見出すだろうからだが）懺悔もせず，信仰告白もなく，この鉄仮面が死んで行くこと，死後でさえ自由を得ることがないかのように鉄の仮面は死者の顔を覆ったままでいることである．この詩は 1821 年 Vigny が 24 才の時書かれた．推測は可能でも，この詩にはまだ人生とはこの鉄仮面のつながれていた牢獄のようなものだとはっきりとは書かれていない．ところが1829年頃からこの問題にたちかえった Vigny は 1832 年には明確に人生を牢獄にたとえているのである．

Dans cette prison nommée la vie, d'où nous partons les uns aprés les autres pour aller à la mort, il ne faut compter sur aucune promenade, ni aucune fleur. Dès lors, le moindre bouquet, la plus petite feuille réjouit la vue et le cœur, on en sait gré à la puissance qui a permis qu'elle se rencontrât sous vos pas. Il est vrai que vous ne savez pas pourquoi vous êtes prisonnier et de quoi puni ; mais vous savez à n'en pas douter quelle sera votre peine : souffrance en prison, mort après. Ne pensez pas au juge, ni au procès que vous ignorerez toujours, mais seulement à remercier le geôlier inconnu qui vous permet souvent des joies dignes du ciel.

また人生とは次のようなものだとも云える．

Voici la vie humaine. Je me figure une foule d'hommes, de femmes et d'enfants, saisis dans un sommeil profond. Ils se réveillent emprisonnés. Ils s'accoutument à leur prison et s'y font de petits jardins. Peu à peu, ils s'aperçoivent qu' on les enlève les uns après les autres pour toujours. Ils ne savent ni pourquoi ils sont en prison, ni où on les conduit après et ils savent qu'ils ne le sauront jamais. Cependant, il y en a parmi eux qui ne cessent de se quereller pour savoir l'histoire de leur procès, et il y en a qui en inventent les pièces ; d'autres qui racontent ce qu'ils deviennent après la prison, sans le savoir. Ne sont-ils pas fous ? Il est certain que le maître de la prison, le gouverneur, nous eût fait savoir, s'il l'eût voulu, et notre procès et notre arrêt. Puisqu'il ne l'a pas voulu et ne le voudra jamais, contentons-nous de le remercier des logements plus ou moins bons qu'il nous donne, et, puisque nous ne pouvons nous soustraire à la misère commune, ne la rendons pas double par des questions sans fin. Nous ne sommes pas sûrs de tout savoir au sortir du cachot, mais sûrs de ne rien

savoir dedans. (Le Journal d'un Poète 1832)

人生に対するこの決定的幻滅は「Docteur Noir の第二の診断書」という小説（註8）の構想と平行して確固としたものとなる．その基本的な考えはだいたい以上のようなものだと思われる．多少の nuance の相違はあれ，1832年 から 1835 年にかけて "Le Journal d'un Poète" にはこれと類似の考えが繰り返し述べられている．彼の anti-christianisme はこの時期に固定したと考えても誤りないと思われる．そして時を同じくして彼の「名誉」の感情の anti-chrétian な性質も定着した．それは次の文章で証拠づけられるのである．

Tel est l'homme moderne en France. L'honneur est sa foi, sa conscience sa morale, le devoir sa loi ; il est actif et savant. Sa science première est celle de son état ; il ne veut plus permettre à son imagination d'errer dans les champs de la théologie et de la superstition ; il combat et sert la patrie et l'espèce humaine dans les temps présents sans vouloir préjuger de l'éternité. Il désire que Dieu soit et qu'il reçoive le juste dans sa paix ; mais il ne croit pas toujours et n'affirme plus rien. Quelle est l'idée qui soutient son courage ? Il ne le dit même pas. (Le Journal d'un Poète 1834)

三

これまでに Vigny が考えていた「名誉」とはどのようなものであるのか，また，それを培ったものが何であるかを検討した．次にはそれが意味するものを考えてみよう．

第一に，現実に触れるうちに，幼時に植つけられた精神的束縛から脱しつつ，彼が索め得た心の支柱として，それは意義があると考えられる．

第二に，上記と関連しつつ，より普遍的視野から人間の条件を反省するにいたった彼がその信仰の難破の中で摑み得た，或いは縋らざるを得なかった救命ブイのようなものであると解釈され得る．

前章で彼の「名誉」の感情を培った二つのものを調べた．それ等から生まれたこの感情の形成過程は逆に云えばそれ等からの離脱の径路でもあった．Vigny は noblesse de l'épée としての誇りと義務の観念を両親から伝承した．それは無条件の授受であって，彼はこの伝統を理屈抜きに，無批判的に受け入れていたと云っても過言ではない．noblesse de l'épée としての家柄を重んずることはかつては大いに意味があったとしても，旧制度が瓦解したため，実質的には昔時に比するとそれは無に等しくなっていた．その土台となっていたものは，後に彼自身が述べるように，恰も王権神授説が不合理となった如く，根拠を失っていた．noblesse de l'épée としての家柄の尊重とは現実には迷信に基くものでしかなかったのである．したがって，過去の亡霊に満ちていたこの古い家を一歩出て，現実に直面すれば矛盾に悩まねばならなかった．Vigny が現実から最初に得たものは被害者意識であって，貴族であることを示す de は彼にとってはアメリカの有色人種の如き被圧迫者の印となったのである．（註9）更に，このような現実に敢然としてたち向うにしても，やはり，既に意味を失ったものに執着することは敗北の道でしかない．如何に親しく，

棄てがたいものであっても，不合理となってしまったもの，過去の遺物となったもの，瓦解した制度の残骸は，切って捨てなければ，生存してはゆけない．Vigny が自分の立場を冷静に判断し，彼としては絶対に棄て得ないものを残し，或いは形を変えて，残余のいわば noblesse de l'épée にまつわる封建的桎梏から脱却し得たのは 1830 年の 7 月革命以後のことである．当時の彼の苦悩を記録した "Le Journal d'un Poète" の記事はこの解放の経過の記録でもある．Les Bourbons に対する séidisme からは，1829 年の記事で分るように，すでに脱却しつつあった．それが所謂栄光の 3 日で決定的となったのである．

Les Bourbons. …Je les verrai peut-être tomber mais je ne jetterai pas un caillou pour précipiter leur chute. (Le Journal d'un Poète 1829)

J'ai préparé mon vieil uniforme. Si le Roi appelle tous les officiers, j'irai. … Pourquoi ai-je senti que je me devais à cette mort ? … Cela est absurde. Il ne saura ni mon nom ni ma fin. Mais mon père, quand j'étais encore enfant, me faisait baiser la croix de Saint-Louis, sous l'Empire: supperstition, superstition politique, sans racine, puérile, vieux préjugé de fidélité noble, d'attachement de famille, sorte de vasselage, de parenté du serf au seigneur. (Le Journal d'un Poète le 29 juillet 1830)

Donc, en trois jours, ce vieux trône sapé ! J'en ai fini pour toujours avec le gênantes superstitions politiques. Elles seules pouvaient troubler mes idées par leurs mouvements d'instinct. …Si le duc d'Enghien eût été là ou seulement le duc de Berry, j'y serais mort. C'eût peut-être dommage. Qui sait ce que je ferai! (Le Journal d'un Poète le 31 juillet 1830)

このことについては，「名誉」の感情の形成過程を説明するに当って Renaud 大尉を例証として既に触れてあるので多言を要しない．あの話での Napoléon に対する盲信を Les Bourbons に対する迷信的臣従に置き換えれば，この大尉の場合はそっくり Vigny の立場となる．重要なことは大尉の場合軍人としての義務の尊重，誓言の遵守は，より人間的な義務や誓言のそれと変っていることで，人間の精神的支柱となっていることである．動乱の時代を超え，1832年以後「Docteur Noir の第二の診断書」の構想が進むにしたがって，彼の「名誉」の感情にみられる chevaleresque な性質はこのような特性を持つにいたったのである．かくして

La foi est le respect de Dieu. L'honneur est le respect des hommes. (Le Journal d'un Poète 1833) となり，「名誉」は社会的 paria である貴族，軍人，詩人ばかりでなく，すべての人間にとって生きて行く為の道徳的基盤となる．

noblesse de l'épée としての矜誇が幼時に植えつけられたように Vigny はキリスト教的宗教教育を幼時より受けていた．これと騎士道精神とは密接なつながりを持つ．Vigny は noblesse de l'épée としての家柄に対する誇りを抵抗なく受け入れたと同様にキリスト教も何の疑念もなく信じていたと考えられる．ところが，かつては貴族の長兄であって，後には主人ともなった王の首が落ちることによって王権神授説が迷信となったように，神の存在も既におびやかされていたの

である．彼に神の存在を証明する母親の方法にすら，それは感じられるが，その母親から "Les conseils à mon fils" の中で 17 世紀の天才達の固い信仰の優位を認識するよう勧められた時，Vigny 自身もう幼時の信仰への疑惑を抱いていたことが推測されている．(註 10) その時彼は 18 才であった．その後に彼が抱いた反キリスト教的思想は前章で既に概観したところである．それは要するに旧約聖書の神に対する反抗であり，復讐の神，非情の神の告発であった．しかし，新約聖書の仲介者としてのキリストはまだ認められているのか，これに対する特別な言及はない．人間の味方として，弱い者達の庇護者としてのキリスト像は陰見するが，彼自身も神を疑っているキリストの姿は，まだ Vigny の初期 anti-christianisme には見られない．それがこの時期の特徴である．その後は大いなる犠牲者，人類に対する憐憫にあふれたキリストと云う考えから次第にキリストの神性を疑う方向に，キリストをもって人間苦悩の代表者とみなす方向に進み，"Le Mont des Oliviers" が生まれる．"Servitude et Grandeur militaires" において「名誉」が賞揚され，軍人が「名誉の宗教」の殉教者と呼ばれる時期はちょうどその中間の時期である．この時期の彼の頭を占めていた考えは，前章で述べた通り，つずめて云えば「人生は牢獄であって，人間は死刑囚である．ただし判決理由は永久に知られない．裁判の記録は焼けてしまったのだから探しても無駄だ．」と云うものであった．したがって，人生においてなすべきことは，すべてに絶望し，すべてを侮蔑することとなる．人の心に巣喰う希望を根絶しなければならないのである．希望こそは吾々の最大の狂気である．安らかな絶望，天に向っての怒りの痙攣もなく，非難もない絶望が，えい智そのものなのである．人生に対する最上の批判はと云えば，それは沈黙ということになる．古人の残した格言 "Souffre et abstiens-toi" こそ，この人生で生きる，また立派に死ぬる態度である．この態度は後に "La Mort du Loup" で確立する Vigny の所謂 stoïcisme に結びつく．"Servitude et Grandeur militaires" では，かの軍人達が実践している自己抛棄と全き諦観がこの態度に呼応する．自己抛棄とは不断の冷然たる死を待ちのぞむ心であった．Vigny にとっても人生の実相である絶望に直面し，自殺も他殺も肯定せず生き抜こうとすれば，やはり，これがとらざるを得なかった態度である．「名誉」はこの嵐の海で彼が縋りつくことのできる唯一のものである．或いは「名誉」はむしろ彼の宗教である．これが彼にあらゆる罪，卑劣な行為をしないようにさせる．彼の心の中ではキリスト教は死んでいる．「名誉の宗教」がキリスト教にとって代っているので，その宗教は人の心の中に神を持っているのである．

ところで，「名誉」は遂に「名誉の宗教」にまで高められたが，これが Vigny の思想の頂点をなすものであろうか，"Servitude et Grandeur militaires" を世に問うた後も「名誉」または「名誉の宗教」の信仰を Vigny は失っていない．それは "Le Journal d'un Poète" を調査すれば証明し得ることである．(註11) しかし，その反キリスト教的特質は和らげられているように感じられる，むしろ吾々に「名誉」を遺贈したのはキリスト教であり，「名誉の宗教」はキリスト教と並存し，これを補佐する性質の宗教とさえ考えられるようになる．これは彼の回心を告げるものではない．キリスト教の役割の重要性を再認識したことに帰因するものと思われる．これはキリスト教擁護の観さえ呈し，「Docteur Noir の第二の診断書」である "Daphné" の発表を断念させるに至

る．一般大衆とは精神的な意味では，要するに弱者である．彼等に真実をありのままつきつけても必ずしも良い結果は生まれない．キリスト教はこの弱者共に恰好のものである．あえてこれより神秘のヴェールを剝ぎとって，大衆から一切のより所を奪いとっても意味はない．それどころか非常に危険でさえある．というのがこの擁護の基本的な考えのようである．そうだとすれば，「名誉の宗教」の反キリスト教的性質が弱められるのも納得されぬことでもない．何故ならこれは強者の宗教なのであるから．しかし，その反キリスト教的性質を弱められると「名誉の宗教」は宗教としての力強さを失う．それに「名誉」は軍人として，noblesse de l'épée の子孫として，或いは反抗的人間（註 12）としての Vigny を支えるものとして重要なものであったが，詩人として，芸術家としての彼の要請には必ずしも答えていなかった．L'honneur, c'est la poésie du devoir. と定義されただけでは不充分だったのである．立派に生る努力は確かに「名誉」に到るが，芸術の美が通ずるものは atticisme であろう．L'honneur est l'atticisme dans actions. と云う新たな定義が生まれても，詩人が追求すべき美が問題となる時，秤はより後者に傾き，l'honneur より l'atticisme へ移る道は既に用意されているのである．「名誉」とはつまるところ "Servitude et Grandeur militaires の軍人や "La Mort du Loup" の狼の雄々しいが苦痛に満ちた努力を支えるものであっても，詩人が登る神殿，学徳高き詩神のいます宮居にいたる道を示す教えではない．もし Vigny か父祖より受けついだ血に由来する貴族としての家の没落や，かつての栄光も勲功もなく，今や滅亡の一途にあり，また滅亡すべき軍隊，或いは呪われたる詩人の運命等をなげくことなく，晴朗な心で頷づくことがあるとすれば，それはこの「名誉の宗教」の祭壇の前ではない．吾々には彼の「名誉」の感情を彼が抱き得た最高に価値あるものとは考えられないのである．最高に価値あるものは，ずっと先で，正に彼の死の寸前で，或いは吾々に示されたことからすれば彼の死後において，あかされるので，それこそ，真に宗教と呼ばれ得ると思われるが，それは La Religion de l'Esprit Pur なのである．しかし，吾々が，ここで対象としたのは，「名誉」であり，Vigny の「名誉」の感情，彼の「名誉の宗教」であって，その特質，基盤，意義について概観するのが課題であった．L'Esprit Pur については後日に検討の機会を持つことを期するものである．ただここで強調して置きたいのは，その La Religion de L'Esprit Pur も根本の支えとして持っているのは，この名誉の感情であることである．ここでは充分に説き明かすことができなかったが，Vigny の「名誉」の感情の有している美学的な面，抽象的な面をより深く究明してゆくならば，これがどのようにしてより高次の l'Esprit に到達するのかがつきとめられるであろう．今後の課題は Vigny の使っている l'atticisme と云う語で意味されるものの解明とやはり L'Esprit Pur の全き理解となるのである．Vigny の「名誉の宗教」が彼の家柄についての意識に礎石を持つ以上，chevaleresque な性質のものであることは容易に想像され得る．しかし，彼のこの宗教の特質は anti-chrétien なところにある．また「名誉」が顕揚されるのが，あの Hélas と Pourquoi という永遠の二つの言葉にかかわるためであることは，この一見して時代錯誤的感情をむしろ非常に現代的にさえ見せる．（註 13）しかし，ここでは吾々の時代の作家達の中にこれと類似の考えを索めることは，あえてしなかった．ここで注意を惹くことを願ったのは，

pessimisme を根底とし，stoïcisme を中間に位置せしめ，La Religion de l'Honneur を頂上に置くという図でなく，pessimisme と遠く先の方にある La Religion de l'Esprit Pur との間に置かれた l'honneur と云う解釈である．

註 1. pessimiste なる語が意味するところは少しく吟味を要する．何故ならば Vigny の pessimisme は人生での通俗的意味よりする失望からだけでは理解され得ないからである．Faguet の "Les Religions de Vigny" の中で述べられている単に陽気でない人の意味にとって Crouslé 氏を驚かせた学生の話もさることながら，pessimiste が意味するものは必ずしも確定していないので，Vigny が pessimiste と呼ばれるとするならば，どのような意味においてかを明確にする必要が生じる．Faguet によると pessimiste とは反抗的人間のことである．それは神が地上に残した悪の故に，神を憎むまでに神に対して腹を立てている人間を意味する．そうして Faguet は 1830 年或いは 1835 年から 1860 年にかけて，こうした意味で Vigny が Pessimiste であったと認めているのである．彼の pessimisme の定義が一般に承認されるかどうかは今は問わぬとして，Vigny の場合のみを考えてみると pessimiste と云う言葉をもってこのような意味に用いるとすれば，彼を poète pessimiste と呼ぶのは不当ではないと思われる．本文に述べる如く彼の anti-christianisme 或いは anti-théisme は彼の初期の幾つかの詩篇に既に検出されるのである．少くともこの anti-christianisme を徐いては Vgny の pessimisme の理解は充分ではないのである．

註 2. 小説 "Servitude et Grandeur militaires" 第三話の主人公

註 3. 小説 "Cing-Mars" によると Vigny は貴族階級の没落の原因を Louis XIII と Richelieu の治政方針にみている．大革命はむしろその結果である．

註 4. "Le Journal d'un Poète" Pléiade 版 1847 Fragments de mémoires

註 5. "Le Journal d'un Porte" 1830 年の部を調べると，この政治的迷信からの離脱が如何に苦痛をもってなされたかがよく分る．これについては（三）で述べてあるので詳述しないが，名誉について Vigny がもっとも多く反省したのは 1834 年と思われる．日記で名誉についての記事が最も多く見出されるのはこの年である．

註 6. Véra A. Summers; "L'Orientalisme d'Alfred de Vigny" Chapitre 1er

註 7. "Le Journal d'un Poète" 1847 pléiade 版 第二巻 P. 1260
"Le Journal d'un Poète" 1852 Pléiade 版 第二巻 P. 1298
"Mémoires inédits" P. 56

註 8. 小説 "Daphné" として今日吾々の手にし得るものは，この小説の一部であったと推測される．"Daphné" 自体も未完である．これは，以前に扱ったことがあるが，「名誉」の観点からするとこの時期では chevaleresque な性質より anti-chrétien な性質が強くなっているのである．

註 9. "Mémoires inédits" P. 70

註 10. Véra A. Summers; "L'Orientalisme d'Alfred de Vigny" Chapitre 1er,

註 11. 前にも記したように名誉についての記事は 1834 年が一番い多い．しかし，数は少いがその後も幾度か「詩人の日記」に出て来る．最も晩年のものは 1862 年．死ぬ一年前のものである．

註 12. Albert Camus の Homme révolté にそれ程積極的意味ではないとしても Vigny のことが反抗的人間の一人として述べられている．

註 13. Vigny と Camus の類似についてはすでに Castex 氏が述べている．Camus et Vigny; Information Litteraire, Sept-Oct. 1963

主要参考文献

Robert Eude. — Alfred de Vigny intime, Paris 1912; Comité A. de Vigny.

P. Flottes. — La Pensée Politique et sociale d'Alfred de Vigny, Paris 1927; Les Belles Lettres.

Véra Summers. — L'Originalitism d'A. de Vigny, Paris 1930 ; Champion.

Ivanca Popova. — L'Originalité de l'œuvre d'A. de Vigny, Toulouse 1937 ; imprimerie du sud-ouest.

George Bonnefoy. — La Pensée religieuse et morale d'Alfred de Vigny, Paris 1944 ; Hachette.

François Germain. — L'Imagination d'Alfred de Vigny, Paris 1961 ; José Corti.

P. G. Castex. — Alfred de Vigny, Nouvelle édition revue et mise à jour, Paris 1963 ; Hatier-Boivin.

Emile Faguet. — Les Religions de Vigny ; Revue Latine 1903.

George Mossé. — Le Pessimisme de Vigny ; Nouvelle Revue, 1907.

Jules Bertaut. — La Religion de l'Honneur chez Alfred de Vigny ; Revue des Revues, 1913.

P. G. Castex. — Camus et Vigny ; Information Littéraire, Sep-Oct. 1963.